

## ユーゴ紛争の跡を追って

砂山 充子

### はじめに

ティトー時代のユーゴスラヴィア<sup>1</sup>には国を説明するのに「7つの隣接国、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、1つの文字、1つの連邦共和国」<sup>2</sup>という数え歌があったという。

7つの隣接国とは、イタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニア。六つの共和国とはユーゴスラヴィア連邦を構成していたスロヴェニア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、モンテネグロ共和国をさす。

(そしてセルビアには、南にコソヴォ、北にヴォイヴォディナという2つの自治州があった。)

6つの民族とは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、マケドニア人、モンテネグロ人である。6共和国のうち、ボスニア・ヘルツェゴヴィナだけは、何々人という民族をもたず、そこはセルビア人、クロアチア人、イスラーム教徒であるムスリム人が居住する。「ムスリム人」

(大文字で始まる *Muslimani*) という民族名は、1963年から正式に認められ、1971年の国勢調査から採用された<sup>3</sup>。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国独立宣言以後、ボスニアのムスリム人は「ボシュニャク人」と自称するようになった<sup>4</sup>。「ボシュニャク」とは12世紀末に成立した中世ボスニア王国の時に形成されたボスニア人意識であるという説<sup>5</sup>もあるが、近年の歴史研究によれば、ボスニアにおける「民族」意識は「ミツレットとよばれるオスマン帝国の宗教自治制度とボスニア外部で生まれたセルビアとクロアチアのナショナリズムの影響によって、19世

---

<sup>1</sup> 第二次大戦後に成立したユーゴスラヴィア連邦人民共和国。1963年からは国名はユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国。「第2ユーゴ」とも呼ばれる。「第1ユーゴ」は1918年に成立したセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(1929年以降はユーゴスラヴィア王国)、「第3ユーゴ」は、第2ユーゴから、各共和国が分離独立後残ったセルビアとモンテネグロからなるユーゴスラヴィア連邦共和国である。これもモンテネグロが独立したため、消滅した。本稿では「第2ユーゴ」を「旧ユーゴスラヴィア」と表記する。

<sup>2</sup> 柴宜弘「ユーゴスラビアの民族」南塚伸吾編『東欧の民族と文化』、彩流社、1989年、241頁。

<sup>3</sup> 月村太郎『ユーゴ内戦』、東京大学出版会、2006年、261頁。本書は内戦をめぐってどのような政治的な動きが当事者間にあったかを明らかにしたものである。

<sup>4</sup> 公式な民族名称としては、1993年11月28日の第二回ボスニア人会議で採用された。佐原徹哉「ポスト社会主義期のボスニア人ナショナリズム」佐原徹哉編『ナショナリズムから共生の政治文化へ ユーゴ内戦10年の経験から』北海道大学スラブ研究センター、2002年、27頁。佐原は「ボシュニャク」を「ボスニアに暮らす固有の民族」という意味で「ボスニア人」という訳語を使っている。

<sup>5</sup> 多谷千香子『「民族浄化」を裁く』岩波新書、2005年、83-84頁。

出典は示されていないが、おそらく、内戦後に書かれたイマモヴィチの『ボスニアの歴史』(Imamović, Mustafa, *Historija Bošnjaka*, 1997, Preporod, Sarajevo)での主張である。

紀に徐々に明確化し、20世紀初頭に確立した」<sup>6</sup> のだという。いずれにしても、「ボシュニャク」と名乗ったのは、三つ巴の戦いとなったボスニア内戦で、敵対するセルビア人やクロアチア人に対して、自らが国家の担い手であると宣言することであった<sup>7</sup>。ボスニアは東方正教会世界とカトリック世界の境界に位置していた。かつてボゴミル派という異端のキリスト教徒が居住し、オスマンの支配を受けたときに、彼らがイスラームに改宗したと説明されてきた<sup>8</sup>。ただし、最近の実証研究によると、彼らはイスラームにのみ改宗したのではなく、カトリックや正教に改宗したケースも多かったらしいことがわかってきた<sup>9</sup>。

4つの言語とは、スロヴェニア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語である。3つの宗教とは、カトリック、正教、それにイスラームである。ラテン文字とキリル文字が2つの文字である。そして1つの国家とはユーゴスラヴィア連邦のことをさす。

旧ユーゴスラヴィアだった地域は、現在、スロヴェニア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、マケドニアの各国となっている。セルビア共和国内のコソヴォは2008年に独立を宣言し、2010年7月には国際司法裁判所もコソヴォのセルビアからの独立の合法性を認めているが、いまだにその独立を承認していない国もある。コソヴォを承認しているのはアメリカ、日本、ヨーロッパの国々など69ヶ国である。セルビアと友好関係にあるロシアや、アジア・アフリカ諸国などは未承認である。ヨーロッパでもギリシアや国内にバスクやカタルーニャなど独立志向の高い地域を抱えるスペインは承認していない<sup>10</sup>。コソヴォが独立を宣言した時、スペインのバスク自治州のスポークスマン、ミレン・アスカラテは「コソヴォ独立のプロセスはアイデンティティと国家への帰属の問題への平和的、民主的解決方法だ」<sup>11</sup>と高く評価した。

このうち、今回の調査で訪れたボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国がある地域は、オスマン帝国の支配を受けたあと、1878年にはオーストリア・ハンガリー帝国に占領され、1908年にはオーストリアに併合、1918年、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の一部となり、1929年にこの国がユーゴスラヴィア王国と改称。その後、第二次大戦後、ティトーの率いるユーゴスラヴィア連邦内の一共和国となった。現在では、「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦（クロアチア人とムスリム人の連邦）」と「スプルツカ共和国（セルビア人共和国）」の2つの

---

<sup>6</sup> 佐原徹哉、2002年、30頁。

<sup>7</sup> 佐原徹哉『ボスニア内戦』有志舎、2008年、10頁。

<sup>8</sup> 例えば柴宜弘「ユーゴスラビアの民族」南塚伸吾編『東欧の民族と文化』彩流社、1989年、249-250頁

<sup>9</sup> ロバート・J・ドーナ、ジョン・V・A・ファイン（佐原徹哉訳）『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』恒文社、1996年、43-53頁。訳者後書よれば本書は「歴史研究者として実力を備えた著者によるほぼ唯一ともいえる体系的なボスニアの通史」287頁 だという。

<sup>10</sup> Eva Sáiz, “Preguntas y respuestas sobre Kosovo”, *El País*, 22-Julio-2010.

<sup>11</sup> バスク自治州政府による宣言。“El Gobierno vasco dice que Kosovo supone una lección para resolver los conflictos de identidad”, *El País*, 17-Feb.-2008.

構成体(Entity 政体、国家内国家)から構成される。前者が面積の 51%を、後者が 49%を占める。これは、1995 年 11 月にアメリカ合衆国オハイオ州デイトンにあるライト・パターソン空軍基地で話し合わせ、12 月パリで調印されたボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争の和平、デイトン合意<sup>12</sup> で制定されたものだった。

スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニアが分離独立したあと、残ったセルビアとモンテネグロが新ユーゴスラヴィアを名のったものの、2003 年には、「国家連合 セルビア・モンテネグロ」となり、2006 年にモンテネグロが独立し、国家連合を解消し、ユーゴスラヴィアという国は地図上から消えた。調査旅行で訪れた各地で戦争の跡を追った。

## 1 ユーゴスラヴィア紛争

1990 年代、ニュースは連日のように旧ユーゴスラヴィアでの紛争について伝えていた。バルカンはヨーロッパの火薬庫と呼ばれ、紛争が絶えなかった地域である。ユーゴスラヴィア紛争として一括りにされるユーゴスラヴィアの解体は以下の五つの紛争に分けられる<sup>13</sup>。

1 スロヴェニア独立：1991 年 6 月 25 日のスロヴェニア独立宣言に伴う国境管理をめぐるスロヴェニア共和国部隊とユーゴスラヴィア連邦人民軍との衝突。スロヴェニア共和国部隊の力を過小評価していたユーゴ連邦軍が早期に撤退し、10 日間で終結したため、「10 日間戦争」と呼ばれている。オスマン帝国の支配を受けていないスロヴェニアは他の共和国と異なり、民族構成が単純で、スロヴェニア人が 90%以上を占めていたため、比較的早期に紛争が解決した。

2 クロアチア内戦：1991 年 6 月 25 日のクロアチア独立宣言後のクロアチアでの、クロアチア軍対連邦軍の支援を受けたセルビア人勢力による紛争。1991 年 8 月に全面戦争に突入した。12 月 19 日、セルビア人勢力は主たる居住地のクライナ地方を制圧し、「クライナ・セルビア人共和国」樹立を宣言した。1992 年 1 月 2 日に国連の調停で停戦に至るが、その後も膠着状況が続く。1995 年 5 月には西スラヴォニア平定作戦「閃光」を、1995 年 8 月にはクロアチア軍は「嵐作戦」を実施し、「クライナ・セルビア人共和国」の首都及び主要地域を奪還した。1998 年 1 月、その他の地域もクロアチアに統合された。このプロセスの中で、多くのセルビア系住民がクロアチアから脱出した。

3 ボスニア内戦：10~20 万の死者と 200~250 万の難民<sup>14</sup> を出したと言われているボスニ

<sup>12</sup> ミロシェヴィチ (セルビア大統領)、イゼトベゴヴィチ (ボスニア・ヘルツェゴヴィナ大統領)、トウジマン (クロアチア大統領)、ドイツ代表団、フランス代表団、イギリス代表団、ロシア代表団、EU 代表団が集められた。

<sup>13</sup> 山崎信一「ユーゴスラヴィア紛争と暴力」、柴宜弘編著『バルカンを知るための 65 章』明石書店、2005 年、88-90 頁

<sup>14</sup> 一連の戦争による死者、避難民の数については諸説ある。最近は下方修正される傾向にある。柴宜弘は

ア内戦である。当初はボスニアの独立を目指すムスリム人とクロアチア人勢力対、ユーゴへの残留を求めるセルビア人勢力の戦いであったが、後に三つ巴の戦いとなった。膠着状態となったボスニア内戦に決定的な影響を与えたのが、1995年8月末のNATO軍による空爆であった。セルビア人勢力は、地上からは、NATO軍、ボスニア政府軍、クロアチア政府軍などに攻撃を受け、退却していった。 Dayton合意により、一応の終結を迎えた。

4 コソヴォ紛争：1998年のセルビア共和国内のコソヴォ自治州に住むアルバニア人とセルビア治安部隊の衝突がその端緒である。当初は国際社会の介入による政治的解決が目指されたものの失敗し、1999年3月にNATO軍によるセルビアやモンテネグロへの空爆が開始された。その後、NATO主体の国際治安部隊が駐屯したが、人口の9割を占めるアルバニア系住民とセルビア人との衝突は収まらず、国連やEU、米ソによる調停も失敗した。2008年2月17日に開催されたコソヴォ自治州議会で、セルビアからの独立宣言を採択した<sup>15</sup>。

5 マケドニアにおけるマケドニア人とアルバニア人の衝突：2001年春以降、コソヴォ紛争の影響から、1991年9月17日の独立宣言以降、共存していた両民族間の武力衝突が発生した。2001年8月和平が合意され、徐々にアルバニア人の権利拡大が実現している。

## 2 ティトのユーゴスラヴィア 緩い連邦制

旧ユーゴスラヴィアは、第二次世界大戦のパルチザンのリーダー、ティトのもと「友愛と団結」というスローガンに従って、諸民族の平等の原則を維持し、大きな自治権をもつ共和国が緩やかに結合する連邦制をとってきた。1948年6月、コミンフォルムから追放されると、ユーゴは独自の自主管理路線を取っていくことになる。そして1960年代からは東西冷戦下で、非同盟のリーダーとしての役割を果たしていく。

1950年代のユーゴは自主管理社会主義路線を進めていたものの、当初は、ソ連型の連邦中央の権限が強力な連邦制であった。「1974年憲法」によって、分権的な緩い連邦制が実現した。6共和国と2自治州が、憲法、経済主権、警察権、裁判権などを持つ形となり、国の最高決定機関である連邦幹部会でも各共和国、自治州が平等に一票を行使するようになった<sup>16</sup>。こうした緩やかな連邦制を支えていた3つの要素が、ティト、各共和国の共産主義者同盟(共産党)、

---

ジョン・ヘーガン(本間さおり訳)『戦争法廷を裁く』(上)、NHKブックス、2011年の解説で、死者10万、避難民200万という数字をあげている。xii頁。

<sup>15</sup> ピーター・ブロック(田辺希久子訳)『戦争報道 メディアの大罪』ダイヤモンド社、2009年、柴宜弘による後書、486-488頁。

<sup>16</sup> それ以前は6共和国からそれぞれ3名、2自治州から各2名、それにティトを加えて、合計23名がメンバーだった。1974年憲法体制では、6共和国、2自治州からそれぞれ1名ずつ、それにティトで9名がメンバーとなった。柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店、1996年、128-130頁。

徴兵制からなるユーゴスラヴィア連邦人民軍であった<sup>17</sup>。

民族については、1974年憲法の170条でこう規定されていた。「市民には民族および少数民族<sup>18</sup>への帰属を表明し、民族文化を表現し、自己の言語と文字を使用する自由が保障されている。市民はどの民族、または少数民族に帰属するのかを明らかにする義務はなく、所与の民族または少数民族への帰属を指定されることもない。」<sup>19</sup>つまり民族は自己申告制だったということになる。

旧ユーゴの住民は基本的には、南スラブ系という同じ人種に属している。ムスリム人と呼ばれる人々も、どこか他の地域から来たのではなく、オスマン帝国時代にイスラーム教徒になった人々の子孫である。従って外見からでは区別は出来ず、唯一の違いは宗教ということになる。ところが、社会主義時代に禁止はされなかったものの、宗教組織の財産没収や教育からの宗教の分離など、明らかな世俗化がすすんだ<sup>20</sup>。その結果、ボスニアではクロアチア人でありながらセルビア正教徒だったり、セルビア人でありながらカトリック教徒というケースも存在し、民族と宗教は必ずしも一致しないケースもある<sup>21</sup>。

1948年の国勢調査では、ボスニアのムスリムは独自のコミュニティーを持っているが、独自の「民族」意識は持っていないとされた。1948年の調査では、宗教は自己申告、民族については、「クロアチア人」「セルビア人」か「無申告」を選ぶことが出来、ムスリムの89%が「無申告」を選んだ。1953年の調査では、クロアチア人、セルビア人か民族帰属を明確にしない「ユーゴスラヴィア人」というカテゴリーが出来た。「ユーゴスラヴィア人」というカテゴリーは共産主義同盟により奨励されたが、ユーゴスラヴィア人という民族は存在しなかったので、作り上げられたアイデンティティということになる。ただし、当初は大セルビア主義の隠れ蓑に過ぎないと認識され、強制されたわけでもなかった。サラエヴォのように複数民族が混住していた主として都市部では、異民族間での婚姻も珍しくなかった。そうした婚姻から生まれた子供は「ユーゴスラヴィア人」と申告することが多かった。また、自ら「ユーゴスラヴィア人」というアイデンティティを選んだ人もいる。

1961年以降は10年ごとに国勢調査が行われている。1961年の調査では「民族的帰属としてのムスリム」というカテゴリーが導入された。1968年に共産主義者同盟によって、民族とし

---

<sup>17</sup> 柴宜弘、小沢弘明、岩崎稔による座談会「ユーゴ内戦とはなんだったのか」『現代思想 ユーゴスラヴィア解体』vol.25-14、1997年12月臨時増刊、青土社、9頁。

<sup>18</sup> ここでいう民族 *narod* とは、連邦国家ユーゴスラヴィア内部に政治的な中心を持つ集団であり、少数民族 *narodnost* はそれ以外の民族だった。佐原徹哉「ユーゴ内戦と宗教」『現代思想 ユーゴスラヴィア解体』、174頁。

<sup>19</sup> 柴宜弘編『もっと知りたいユーゴスラヴィア』弘文社、平成3年、105頁。

<sup>20</sup> 佐原徹哉「ユーゴ内戦と宗教」『現代思想 ユーゴスラヴィア解体』175頁。

<sup>21</sup> 柴宜弘、小沢弘明、岩崎稔、前掲座談会、34頁。

での「ムスリム人」という概念が許可され、1971年の調査から正式に取り入れられた<sup>22</sup>。

言語も今でこそ、クロアチア語、セルビア語、ボスニア語というが、かつてはセルビア・クロアチア語（セルブ・クロアート語）と呼ばれていた<sup>23</sup>。この言語の呼称は原語では、**srpskohrvatski** というが、これは、セルビアの (**srpski**) とクロアチアの (**hrvatski**) のという形容詞を二つ重ねた言葉である<sup>24</sup>。使う文字は前者はキリル文字、後者はラテン文字と異なるが、お互いに意思疎通が可能なほぼ同じ言語であるという。どれくらいの感覚かという、日本で言えば「琉球方言と本土方言の違いより遥かに小さく、関東と関西の違い程度」<sup>25</sup> だという。アメリカのある研究者によれば「両者の違いはアメリカ英語とイギリス英語の差より小さい」<sup>26</sup> のだという。

1980年にティトーが死去する。この時点ですでに緩やかな連邦のほころびは始まっていた。経済状況の悪化である。1970年代末から貿易収支の赤字、対外債務が累積し、恒常的なインフレ状態が続く。経済危機と、コソヴォ自治州のアルバニア人暴動への対応を巡って、共産主義者同盟の存在が危うくなっていく。経済先進地域のスロヴェニアやクロアチアでは、統一市場への回帰を目指す憲法修正案への反感が高まった。

東西冷戦終結、ベルリンの壁崩壊後の1990年代初頭には社会主義体制下で連邦制を導入した国々で「民族自決」を掲げる諸民族国家の独立が相次ぎ、世界地図がどんどん書き換えられた。ソ連からは、エストニア、リトビア、ラトビアなどが、チェコ・スロヴァキアからスロヴァキアが独立した。これらの国々では多数を占め中央政府を牛耳っていた民族に対して、抑圧されていた諸民族が民族自決権を掲げたため、旧ユーゴスラヴィアのケースとは異なる。ユーゴスラヴィアの諸民族の独立は、自己の利益を優先させる先進共和国ゆえの経済的要因、南北格差の経済的利益に民族自決が絡んだ結果だという<sup>27</sup>。紛争の原因は、よく言われるような宗教戦争や民族紛争のみだったわけではない。小沢弘明はユーゴスラヴィアの内戦は、ユーゴスラヴィズムとナショナリズムの内戦だと指摘する。ユーゴスラヴィズム、すなわち、ユーゴスラヴィアという連邦国家を守っていこうという動きと、それぞれの民族の国家を作り、連邦を解体しようという動きとの対立である。そして今回の内戦でユーゴスラヴィズムの側が敗北した<sup>28</sup>。

1980年国家統合の求心力だったティトーは後継者を残すことなく、死去した。共産主義者同盟は1990年1月、スロヴェニアの退場により分裂してしまう。連邦軍は、1991年初夏、多民

<sup>22</sup> ロバート・J・ドーニャ、ジョン・V・A・ファイン、前掲書、180-183頁。

<sup>23</sup> 旧ユーゴの他の共和国の言語、スロヴェニア語やマケドニア語は言語としてはかなり異なる。

<sup>24</sup> 柴宜弘編、平成3年、138-139頁。

<sup>25</sup> 中島由美「セルビア・クロアチア語の生成と解体」柴宜弘編著『バルカンを知るための65章』明石書店 271頁。

<sup>26</sup> 柴宜弘編、平成3年、143頁。

<sup>27</sup> 柴宜弘、1996年、159-160頁。

<sup>28</sup> 柴宜弘、小沢弘明、岩崎稔、前掲座談会、17頁。

族連邦国家防衛という任務を放棄し、セルビア人の民族主義実現を目指す組織へと変化した<sup>29</sup>。各共和国、人々をつなぎ止めていた絆がなくなると、ユーゴスラヴィアは長い戦争を経て、解体へと進んでいった。

### 3 サラエヴォ

ミリツカ川のせせらぎを耳にしながら眠られぬ夜をすごす者は、サラエボの夜の声を聞くことができる。まずカトリック聖堂の時計がおもおもしろく 2 時をうつ。1 分ほどおくれて正教会の時計がよわよわしいに 2 時をつげる。それからしばらくすると、イスラム教の時計塔がメッカ時刻で、しわがれた 11 時をならす。シナゴークに鐘楼をもたぬユダヤ人は、独自の時間でいきている。こうして夜、皆が眠りについているときすら、彼らを 4 つにわかち差異は厳然と存在するのだ。<sup>30</sup>

ボスニア生まれの作家アンドリッチ<sup>31</sup> は 1920 年代のサラエヴォをこのように描いた。様々な人々が共存したサラエヴォには歴史の流れの重層性を表す建物が残っている。ジャーナリストのグレーニーは以下<sup>32</sup> のように現代のサラエヴォを描いている。

ことに旧市街では、オスマン・トルコ時代の建造物があちこちにみられるが、ハプスブルク帝国もその 40 年にわたる支配期間に、手をこまねいていたわけではない。こちらのほうは、郵便局などの公共建築にワグナー風の荘重な趣をほどこして、社会の発展に寄与していたことをしっかりと印象づけている。ティト時代には、街の中心部に社会主義リアリズムの建物が乱立したが、他の東欧の街とは違い、それらの建物も不思議とこの街ではそれほど目障りとは思えない。サラエヴォで最もくつろげる場所を挙げるなら、バシュ・チャルシヤだろうか。<sup>33</sup>

バシュ・チャルシヤとは「中心広場」という意味で、その広場の中央には「セビリ」と呼ば

<sup>29</sup> ロバート・J・ドーニャ、ジョン・V・A・ファイン、前掲書、202 頁。

<sup>30</sup> 田中一生『バルカンの心』203-204 頁。田中一生は出典を明記していないがこれはアンドリッチ（田中一生、山崎洋訳）『サラエボの鐘—1920 年代の手紙』恒文社、1997 年の一節である。田中も訳者の一人であるが、翻訳された日本語は多少異なる。

<sup>31</sup> イヴォ・アンドリッチ（1892~1975）、旧ユーゴスラヴィアを代表する作家。1961 年にノーベル文学賞を受賞。代表作は『ドリナの橋』『ボスニア物語』『サラエボの女』など。

<sup>32</sup> ミッシェル・グレーニーは「ガーディアン」や BBC の東欧担当の特派員を務めたイギリスのジャーナリスト。紛争と同時進行で執筆された *The Fall of Yugoslavia*（『ユーゴスラヴィアの崩壊』）は高い評価を得た。

<sup>33</sup> ミーシャ・グレニー（井上健、大坪孝子訳）『ユーゴスラヴィアの崩壊』白水社、1994 年、232 頁。

れる水飲み場がある。周辺にはモスクやイスラーム神学校（マドラサ）がある。少し行くと、セルビア教会も、シナゴグも、カトリック大聖堂もあるというまさに多元文化宗教社会ユーゴスラヴィアの縮図のような街であった。

一連のユーゴスラヴィア紛争のうち、もっとも世界中の注目を集めたのが、複数の民族が共存する旧ユーゴの縮図でもあったボスニア・ヘルツェゴヴィナでの内戦であろう。1991年の調査によれば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの人口比率はムスリム人 49.3%、セルビア人 29.9%、クロアチア人 6.6%、ユーゴスラヴィア人 10.7%だった<sup>34</sup> という。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは 1992 年 3 月に独立を宣言した。当初は、独立に反対する「セルビア人勢力」対独立支持派の「ムスリム人、クロアチア人勢力」の戦いだったが、場所によっては、ムスリム人対クロアチア人勢力の戦いとなったこともあった。

ボスニア「内戦」という言葉を使う人もいれば、ボスニア「紛争」と呼ばれることもある。ボスニアでの戦いは、ボスニア内部の非国際的紛争（＝内戦）であったと同時に、ユーゴスラヴィアの解体とともに進んだので、国際的紛争の側面ももっていた。それゆえ、内戦と呼ぶ人もいれば、紛争という呼ぶ人もいる。ボスニア領域内に住む異なる民族による「内戦」と考えるか、セルビアが介入してきた「侵略戦争」という捉え方も可能である。

サラエヴォは丘陵に囲まれた盆地にある。当初、ユーゴスラヴィア連邦人民軍の後ろ楯を得たセルビア人勢力が丘陵地帯を占拠した。すぐにセルビア人勢力が勝利を収めるか思えた。だが、サラエヴォの狭く入り組んだ道路がそれを阻止し、町中が戦場と化した。国連関係者が訪れる時だけ、つかの間の平和が訪れた。戦争は 1992 年 4 月のセルビア人勢力軍の攻撃で始まった。周囲を山に囲まれているという立地条件ゆえに、サラエヴォはまもなく陥落するかに思えた。しかし、実際には、「気まぐれに降りかかる火の洪水と、首を絞め殺されるような残酷きわまりない行為にさらされながら、ボスニアの首都はもちこたえ、奇蹟的にも自らの足で立っている」<sup>35</sup> のであった。

私たちはクロアチアのザグレブからバスに揺られて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナに入国した。渋滞につかまっていた時、通訳ガイドさんが車のナンバープレートの話を紹介してくれた。以前は、ボスニアのナンバープレートは、ムスリム人は百合マーク、セルビア人の場合には十字章、クロアチア人は市松模様がという風に、所属民族を表すマークがついていたという。そ

<sup>34</sup> 柴宜弘『バルカンの民族主義』山川出版社、1998年、75頁。ユーゴスラヴィア人と申告した人は、ユーゴスラヴィア全体では3%、最も高いボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国で6%。サラエヴォの中心部だけでは16.4%にもなったという。サラエヴォの人はむしろ、「サラエヴォっ子」（サライリヤ）というアイデンティティを持つ人が多いという。同書、76頁。サラエヴォの現地ガイドのマリアさんは今でも自分を「ユーゴスラヴィア人」と思っていると語っていた。（もう世の中にユーゴスラヴィアという国は存在しないのだけだ）

<sup>35</sup> フアン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『サラエヴォ・ノート』みすず書房、1994年、20頁。

れが戦後になって廃止されたという。そうしないと、異なる民族の車に危害を加えることが多かったからだという。 Dayton 合意で一応の停戦は実現したものの、この地域の問題が根本的には解決されていない証左であろう。

サラエヴォと言えば、誰でも思い浮かぶのが、第一次世界大戦勃発のきっかけとなったハブスブルク帝国皇位継承者<sup>36</sup> フランツ・フェルディナント夫妻の殺害事件であろう。サラエヴォの中心を流れるミリャツカ川にかかる橋のたもとで夫妻はセルビア人青年プリンツィプに暗殺された。当時は英雄であった「セルビア人」青年の評価は内戦を経て変わり、橋の名前も一時期のプリンツィプ橋からかつてのラティンスキー橋<sup>37</sup>へと変わっていた。

その並びには内戦中に破壊された建物が、修復中なのか、カバーに覆われて残っていた。フランツ・フェルディナント夫妻は市庁舎であったこの建物から出てきたところを狙われたのだった。後にこの建物はサラエヴォ大学図書館になる。この図書館がボスニア内戦中に攻撃を受け、保存されていた多くの貴重な資料がユーゴ連邦軍に破壊された。スペインの作家、ゴイティソーロは「最も心の痛む光景といえば、旧東方学研究所、かの有名なサラエヴォ図書館だろう。1992年8月26日日曜日、セルビア人民族主義過激派<sup>ウルトランナショナルリスト</sup>が焼夷弾の雨を降らせ、数時間でこの貴重な文化財を灰にしたのだ。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府の広報官が言っているように、これは『第二次世界大戦後にヨーロッパ文化に対して犯された最も野蛮な破壊行為である』<sup>38</sup>と述べる。彼はこの行為を「記憶殺し」と呼んだ。図書館に保管されていた100万冊もの書物、アラビア語、トルコ語、ペルシア語の7500の手稿本が灰となった<sup>39</sup>。スペイン人のゴイティソーロ<sup>40</sup>はこの破壊行為を、5世紀前のスペインの出来事と重ね合わせていた。カトリックによる均質な国家作りを目指したスペインでは、異端審問により、多くのアラビア語の本が焚書の対象となっていた。ゴイティソーロはボスニア内戦のまっただ中の1993年7月、サラエヴォを訪れ、ルポルタージュを執筆した。彼は当時のサラエヴォを半世紀以上前のスペイン内戦と重ねあわせて、『サラエヴォ・ノート』として出版されることになる記事をスペインの日刊紙「エル・パイース」紙に連載した。彼はスペイン内戦(1936-1939)で共和国を救おうと世界各地から駆けつけた文学者、知識人に自らの姿を重ね合わせていた。そして言う。(ス페이

<sup>36</sup> 皇太子という表記が散見されるが、正確には皇位継承者。彼はハブスブルク帝国皇帝フランク・ヨーゼフの甥であった。皇太子アドルフが変死を遂げたため、甥が帝位継承者となっていた。

<sup>37</sup> 川の南のキリスト教徒の居住区ラティンルクというエリアと旧市街をつなぐ橋であったためこの名前が付けられていた。外山純子、中島賢一『クロアチア』日経BP企画、2009年、356-357頁。

<sup>38</sup> フアン・ゴイティソーロ、前掲書、54-55頁。

<sup>39</sup> マリー=ヤニネ・ツァリツ(玉川裕子訳)「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける戦争」『現代思想 ユーゴスラヴィア解体』123頁。

<sup>40</sup> フアン・ゴイティソーロはスペインで第二共和制が成立した1931年にバルセローナで生まれた。スペイン内戦中に母親をフランコ軍の爆撃で失った。フランコ体制下での創作活動の難しさから、1956年からはバリーに自主亡命(autoexilio)をし、近年はモロッコのマラケシュを拠点に小説、エッセイ、ルポルタージュなどを執筆している。

ン内戦の共和国陣営側に)「躊躇せずに積極的にコミットしていった当時の作家たち、ヘミングウェイ、ドス・パソス、ケストラ、シモーヌ・ヴェイユ、オーデン、スペンダー、パスらはどこにいるのか。攻撃され武器を持たない民衆とともに戦った、マルローやオーウェルはどこにいるのか。」<sup>41</sup> サラエヴォはムスリム人、ユダヤ人、クロアチア人、セルビア人などの多民族が共存する寛容とコスモポリタンの伝統が息づく都市だった。ゴイティソーロは現代のサラエヴォから、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒が共存し、豊かな文化を築いた中世のトレドに思いを馳せていた。

サラエヴォはかつて「小さなエルサレム」と呼ばれたほどユダヤ人が多かったという。その多くは15世紀にスペインから追放されたユダヤ人(セファルディー)の末裔だった。1931年の人口統計によると、人口の51%がセファルディーで、セルビア人、クロアチア人の割合は41%だった。サラエヴォのユダヤ人は1941年、ナチの傀儡政権であるクロアチア独立国のウスタシャ(クロアチア人民族主義者)による残虐行為の標的となった。シナゴークは破壊され、財産は没収、多くが地方の収容所に送られ殺戮された<sup>42</sup>。現在では、サラエヴォ在住のユダヤ人はごく少数になっている。

私たちがサラエヴォで昼食を食べたレストラン「イナット・クーチャ」はトルコ風の煉瓦造りの古い建物だった。以前、この建物は、ミリャツカ川の反対側、ちょうど破壊された図書館が建っていた場所にあったのだという。オーストリア・ハンガリー帝国が、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを支配下に治めた時に、川沿いに巨大な市庁舎を建てようとした。しかし、その住人だった当時のオーナーがかたくなに立ち退きを拒否し、長い交渉の結果、橋の反対側に建物をそっくりそのまま移築するということがついたのである。イナット・クーチャでのメニューは「Sarajevski Sahan サラエヴスキ・サハン」という牛肉や鶏肉、オクラなどが入ったシチューだった。サラエヴォ食事案内(在ボスニア・ヘルツェゴヴィナ大使館編)によると、これは数種のシチューが混ぜ合わされていて、民族混住のボスニア・ヘルツェゴヴィナの象徴であるという。

サラエヴォには内戦中に「スナイパー(狙撃兵)通り」と呼ばれた通りがある。町の間抜き通りの一つでもある。周りにあまり建物がないこともあって、そこを動く人々や車はスナイパーの標的になった。人も車も「スナイパー通り」を横切るには全速力で通り抜けなければならなかった。この場所に限らず、戦争中、人々は走って移動することを余儀なくされた。スナイパー通りには古めかしい市電が走っている。ヨーロッパではじめて昼夜運行された市電だ。スナイパー通りでひととき目立つ建物が、黄色く塗られたホリディ・インである。ホリディ・インは

<sup>41</sup> フアン・ゴイティソーロ、前掲書、108頁。

<sup>42</sup> 村田奈々子「ユダヤ人の町」『バルカンを知るための65章』、101-102頁。

世界中にたくさんあるホテルチェーンだが、このホリディ・インは特別な存在である。戦争中唯一、営業を続け、世界各国のジャーナリストが取材の拠点としたホテルだ。映画「ウエルカム・トゥ・サラエボ」<sup>43</sup>でも英国人ジャーナリストが事務所を構えていたのはこのホリディ・インであった。現在ではきれいに修復されているが、内戦当時は、南側はセルビア人勢力からの銃撃により破壊されていたため、北側の比較的安全な部屋のみが使用されていた。

内戦当時出版され、評判を呼んだ一冊の本がある。ミシュランのグリーンガイドを模倣して書かれた『サラエボ旅行案内』<sup>44</sup>である。サブタイトルには「史上初の戦場都市ガイド」とある。1992年4月から93年4月にかけての内戦中に現地で、FAMAという製作集団によって執筆され、出版された。彼らにはまだ戦争を笑い飛ばすだけのユーモアのセンスが残っていた。曰く「サラエボはやせた人ばかりだ。彼らなら最新のダイエット法について本が書ける。唯一必要なのは街を包囲させること—シェイプアップの秘策はそれだ。」<sup>45</sup>そして、メガネ屋には「近頃メガネのレンズを買いに来る人はいない。メガネをかけると、なにもかもよく見え過ぎるからだ。」<sup>46</sup>また、戦時下の物不足状況で人々がいかに工夫しながら生活をしてきたかが記されている。戦争料理ブック 1992/1993という項目では食品の保存方法から始まり、前菜、主菜、パイ、デザート、ソフトドリンク、アルコールという項目が続く。カタツムリやイラクサが食材になり、砂糖と水、それにエチルアルコールでつくる「サラエボコニャック」などが紹介されている。人々のファッションについては「誰もがスポーツウェアを着ている。暖かくて快適だし、速く走ることが出来るから」<sup>47</sup>市民に愛されているリクリエーションは、ウォーキング、ランニング、新たに登場した肉体鍛錬法は伐採だった。木を切り倒し、枝を払い、薪割りをし、湿気の少ない場所に薪を積み上げることだった<sup>48</sup>。「噂はサラエボの街を人が歩くよりも早く駆け抜け、そしてたいいは楽天的なものである。過ぎ去ってはじめてそれが楽天的すぎたことがわかる。」<sup>49</sup>戦時下でも文化活動は絶えることがなかった。映画は週1度、午後1時から上映され、展覧会はスナイパー通りに面した半壊した建物で開催されていた。新聞『オスロボジニェ』も破壊された建物で刊行を続けた。演劇も上演され続けた。スーザン・ソントグは1993年7月、ベケットの「ゴドーを待ちながら」を上演した<sup>50</sup>。ソントグがサラエヴォで待っていたのは、待っていても決して来ないゴドーではなく、クリントンであり、NATO軍の空爆だっ

<sup>43</sup> 実話を元にした映画で、英国人ジャーナリストが戦争中に出会ったある少女を養子として迎えるという話。

<sup>44</sup> FAMA 『サラエボ旅行案内』三修社企画、1994年。

<sup>45</sup> 同上、8頁。

<sup>46</sup> 同上、37頁。

<sup>47</sup> 同上、51頁。

<sup>48</sup> 同上、51頁。

<sup>49</sup> 同上、29頁。

<sup>50</sup> これについては、スーザン・ソントグ（木幡和枝訳）『この時代に思う テロへの眼差し』NTT出版、2002年所収のエッセイ「サラエヴォでゴドーを待ちながら」に詳しい。

た<sup>51</sup>。

私たちは、早朝、かつて砲撃事件が起こったというマルカレ青空市場に出かけた。1994年2月5日、人々で賑わう市場に迫撃砲が撃ち込まれ、60名以上が犠牲になり、200名ほどの負傷者がでたという事件である。犠牲者の多くがムスリムだったために、それは当初はセルビア人勢力による攻撃とされた。しかし、セルビア側はムスリム側の仕掛け爆弾による自作自演だと主張した。ムスリム自作自演という宣伝がデマだったことははっきりしたが、その後の調査でもはっきりとした発射位置も誰が発射したのかもはっきりしなかったという<sup>52</sup>。市場には犠牲者の名前が彫られた碑が建っていた。翌95年8月にも再び同市場に迫撃砲で撃ち込まれるという事件が起きた。再びセルビア人勢力が犯人とされ、これがきっかけで、NATO軍によるセルビア人共和国各地への大規模な空爆が行われた。戦争から数年たった現在、市場はかつての活気を取り戻している。野菜や自家製のチーズ、ピクルスなどが売られていた。私たちはそこで自家製のエルダーフラワーのシロップを買い求めた。

調査旅行に出かける少し前に、東京国際女性映画祭で上映された現在のサラエヴォが舞台となっている「サラエボ、希望の街角」<sup>53</sup> という映画を観た。1974年生まれ的女性監督ヤスミラ・ジュバニッチが描くのは、客室乗務員ルナと管制官のアマルのカップルである。二人ともイスラーム教徒であるが、飲酒をし、肌の露出も気にかげず、夜にはクラブに繰り出すという生活を送っている。愛し合う二人は子供を望んでいたが、なかなか妊娠できずに人工授精による不妊治療を行っていた。二人とも、内戦では辛い経験をしていた。ある日、仕事中にアルコールを飲んで停職処分となったアマルは、厳格なムスリムのかつての戦友と出会い、そこから自身も、イスラームのなかでも厳格なワッハーブ派へとめり込んでいく。ワッハーブ派はイスラームの復興運動を進めるために、サウディアラビアからの影響でボスニアに流入したという。サウディアラビアは内戦中にムスリム勢力に支援を行い、内戦後にワッハーブ派はボスニアに拠点を築いた。<sup>54</sup> そう言えば、サラエヴォにはサウディアラビアからの資金援助で建造されたという立派なモスクがあった。

現在のサラエヴォはイスラーム色が強まってきている。人口統計からも、それは裏付けられる。1991年に49%であったムスリム人（ボシュニャク）の割合は、1997年には87%にまで高まり、30%いたセルビア人と11%の民族帰属を明確にしないユーゴスラヴィア人の大半はサ

---

<sup>51</sup> 前掲書、87頁。

<sup>52</sup> ミーシャ・グレニー（井上健、大坪孝子訳）『ユーゴスラヴィアの崩壊』白水社、1994年、千田善による後書、339頁。

<sup>53</sup> 原題はボスニア語では *Nu Putu*、英語に当てはめると *On the Path* となる。何かに向かう途中にいるという意味。監督によると、この言葉は女性が妊娠した時にも使われ、赤ちゃんがもうすぐ生まれる過程にあるという意味でもある。「サラエボ、希望の街角」パンフレット 岩波ホール、2011年、13頁。

<sup>54</sup> 同上、9頁。

ラエヴォから去っていった<sup>55</sup>。彼らがまたサラエヴォに戻る日は来るのだろうか？

#### 4 トンネル博物館

3年半の間、セルビア人勢力に包囲されたサラエヴォと外部を結ぶルートは2つだけだった。一つはサラエヴォ空港である。ただし、ここから飛び立てるのは、国連軍や特別の許可を得たフライトだけであった。空港がセルビア勢力軍に占拠されると町は完璧に包囲された。水も食料も、医薬品も電気もガスもない状態が続いた。

もう一つが、空港の下を通る形で、包囲された地区と外部とを結ぶ地下トンネルだった。今回の調査旅行で是非訪れたかった場所の一つが、サラエヴォ空港の近くにあるトンネル博物館だった。訪問日がちょうどクリスマスに当たるので、ひょっとして、休館ではないかと心配していた。ホームページで検索して、オーナー（この博物館は個人所有）にメールを出してみたが、返信はなかった。手配してくれた旅行社に依頼して、是非訪問したいので、確認してくれと念を押しておいた。宿泊先のホテルはトンネル博物館の近くにあった。ホテルがあるのはイリチャという地域で、温泉があることで有名だった。こうした温泉付きのホテルはかつてボスニア共産主義者同盟が自らの組織専用として作ったものだった<sup>56</sup>。

小雪が舞う中、バスは小さな民家に到着した。そこがトンネル博物館（写真 1）であった。サラエヴォ担当のガイドのマリアさんはボスニア語でまくしたてるように説明をした。何をどう語っていたのかはわからない。日本人の通訳ガイドさんは、それぞれの土地でのガイドさんの説明を聞き、時にはそれを日本語に訳していたが、多くの場合、このガイドさんはこう言っていますがとか、こういう説もあるのですが、というような説明をしていた。つまり、ガイドさんによって説明内容が微妙に違うということだ。

かつてトンネルの入り口だった場所が現在はトンネル博物館として公開されている<sup>57</sup>。トンネル建設は機密事項だった。そして空港の安定や安全性を脅かすものであってはならなかった。全長 800 メートル、幅約 1.5 メートルのトンネルの西側はドブリニャ（1984 年冬季オリンピックのために開発された地区）から、東側はプトミルからというように両側から掘り進められた。建設決定は 1992 年末、工事開始は翌 93 年の 1 月末だった。ドブリニャの民兵 8 名によって工事は始まった。彼らは毎日 3、4 時間働いたが、天候も悪く、道具も十分でなかったため、工事は遅々として進まなかった。間もなく、東のプトミルからも工事が始まったが、計画が明ら

<sup>55</sup> 柴宜弘「「サラエボ、希望の街角」の背景」同上、8 頁。

<sup>56</sup> ミーシャ・グレニー、前掲書、208 頁。

<sup>57</sup> トンネル博物館についての記述はトンネル博物館発行のパンフレット、Edia&Bajro Kolar, *Tunel*, n.d. に依っている。



写真 1

かになってしまったため、工事は一時中断にされた。しかしドブリニャ側からの掘削作業は継続された。工事は全くの手作業で行われピッケルとシャベル、それにオイルランプがたよりだった。秘密裏に行われた工事だったため、3月になるまで、大統領すら計画について知らなかったという。

再び始まった掘削作業は困難を伴った。二方から始まった工事であったが、唯一の連絡手段はトンネルの上の空港の滑走路を走って行くことだった。さらに事態を悪化させたのが、ボスニア人勢力とクロアチア人勢力の間でも戦闘が始まっていたことだった。しかし、それでもサラエヴォの生き残りをかけてトンネルは完成させなければならなかった。1993年の4月23日に工事が始まり、市民警備隊だけではなく、ミジェヴィナやボスニア中部から鉱夫たちが応援に加わった。工事は3交代制で24時間続けられた。しかし今度は水との戦いが始まった。電力を導入してポンプを設置したが、それでも十分ではなかった。木材の調達が困難だったドブリニャ側ではサラエヴォの工場から調達された鉄が壁用に使用された。ブトミルでは状況は異なり、イグマン山から伐採された木材が使われた。私たちが訪れた博物館はブトミル側の入り口にあり、博物館として公開されている約20メートルの地下トンネルの壁も木材を積み上げたものだった。(写真2) 1993年7月30日21時トンネルは貫通した。ちょうど1993年7月にサラエヴォを訪れたゴイティソーロはこのトンネルの存在について、噂を耳にしたと書き記



写真 2



写真 3

している<sup>58</sup>。

開通当初、人々は物資（食料、オイル、タバコ、武器など）を背負って運んだ。その後、レールが敷設され、物資はトロッコによって運ばれた。しかし、トンネルにはカーブや高低差がありトロッコでも物資を運ぶのは難しかった。特に大雨や雪解け水など水には悩まされることになる。

トンネル博物館にあったサラエヴォの絵にはこうあった。「サラエヴォ オリンピックシティ 1984、包囲された町 1992-93」（写真3）その絵にはオリンピック・スタジアム、プレスセンターやフィギュアスケート、ボブスレー、アルペンスキーなどの会場が描かれている。その町を囲むように、セルビア軍の占領地帯が描かれていた。

サラエヴォは墓地の多い街だった。1984年冬季オリンピックのサブスタジアムは現在では集団墓地になっている。見渡す限り墓標が立ち並び、生誕年は様々であるが、没年はほぼ一致している。町の別の場所には犠牲となった子供たちへの碑が建っていた。

## 5 情報操作

この戦争では各国政府に雇われた「戦争広告代理店」が大きな役割を果たした。クロアチア共和国政府は1991年8月にアメリカ合衆国の広告代理店ルーダー・フィン社と契約し、大セルビア的侵略戦争の犠牲者としてのクロアチア像をアメリカ議会に浸透させることに成功した。どのようなイメージだったかというところ「カトリック教徒のクロアチア人<sup>59</sup>は西欧文明の一部であり、数百年にわたるオスマン支配を受けたオリエン特的正教徒のセルビア人は野蛮である」<sup>60</sup>という主張である。クロアチアは国連に加盟し、アメリカの対セルビア制裁措置発表、対新ユーゴ制裁導入の安保理決定を取り付けた。

その後、ボスニア政府がルーダー・フィン社と契約をした<sup>61</sup>。そして、戦争についての一つの見方を作り上げ、それを世界中に喧伝した<sup>62</sup>。その結果、ボスニアでは、「悪者の」セルビア人が「善良な」ムスリム人を標的にしたというわかりやすい構図が作り上げられ、きわめてシンプルなストーリーが世界中に宣伝された。こうした図式が作り上げられた背景には、この地

<sup>58</sup> フアン・ゴイティソーロ、前掲書、116頁。

<sup>59</sup> カトリックであったスロヴェニア、クロアチアの独立を後押ししていたのは、ヴァチカンである。ヴァチカンは他国に先駆けて、1992年1月13日に両国を承認した。

<sup>60</sup> 清水明子「クロアチア「祖国戦争」と「民族浄化」（1991~1995年）」松村高夫、矢野久編著『大量虐殺の社会史』ミネルヴァ書房、2007年所収。204頁。

<sup>61</sup> ルーダー・フィン社のボスニア担当だったジム・ハーフが独立してグローバル・コミュニケーションズという会社を立ち上げたが、コソヴォ自治州政府からも仕事の依頼を受けていたという。『アエラ』2007年5月14日号。

<sup>62</sup> ルーダー・フィン社は、アメリカへの留学経験があり、英語が堪能でテレビ写りのいい歴史学者のシライジッチ外相を巧みに利用する作戦をとった。『戦争広告代理店』31頁、73頁。

域のきわめて複雑な歴史的背景がある。「ジャーナリストはユーゴスラヴィアが嫌いだ。なぜなら複雑すぎるからだ」<sup>63</sup> という言葉がすべてを表している。ボスニアからニュースを配信したジャーナリストは、少数の例外を除けば、この地域の専門家でもなければ、多くの場合、言語すら理解しなかった。複雑な歴史的背景をきちんと理解しているわけでもなかった。そしてジャーナリストはひたすらスクープを追い求める。「民族浄化」<sup>64</sup> という言葉もルーダー・フィン社が効果的なキャッチコピーとして使いはじめ、そこから広く使用されるようになったという。

「民族浄化」はユーゴスラヴィア紛争についての一連の報道での「バズワード」となった。もともと、セルビア・クロアチア語には「エトウニチコ・シチェーニェ」という言葉があり、これは、第二次大戦中のセルビア人対クロアチア人の間で戦われた戦いで使われていたという。当時、クロアチアにはナチの傀儡政権があり、このときに「浄化」されたのは、セルビア人、クロアチア人だった。セルビアのアウシュビッツと呼ばれているヤセノヴァツでセルビア人、ユダヤ人、反政府のクロアチア人の大虐殺がおこなわれた<sup>65</sup>。第二次大戦後に多民族国家のユーゴスラヴィア連邦が出来たときに、この「民族浄化」という言葉は封印されていた。

またこんな説もある。セルビア・クロアチア語では、「浄化」にあたる言葉は、「地雷除去に行く」意味で使われることが普通だった。これに「民族」に当たる言葉がついて、異民族を掃除に行く、すなわち他民族を撲滅するという意味で使われたのだという。千田は当初はブラックムーモアとして使われていたのが、そのまま広がったのではないかと推察する<sup>66</sup>。

ボスニア内戦が始まってルーダー・フィン社の社員が、「民族浄化」という言葉をさかんに使い、それがジャーナリズムを通じて流布し、言葉の意味が変化していった。「民族浄化」と言えば、「セルビア人がどここの村にやってきて、銃を突きつけ、三十分以内に家を出て行けとモスLEM人に命令し、彼らをトラックに乗せて・・・」<sup>67</sup> という意味になった。

当時の EC 和平特使のイギリス元外相キャリントンは「セルビア人も、クロアチア人も、モスLEM人も、誰もが同じことをしていたのだ。にもかかわらず、セルビア人が被害者となり、他の民族に追い出された場合には“民族浄化”とは呼ばれなかった」という。『ワシントン・ポスト』のアル・ホーンはこう分析する。「“民族浄化”というあまりにも象徴的な言葉を使うことで、紛争の現実が必要以上に単純な構図として伝えられたと思います。現地の事態は、はるかに複雑なものでしたからね」また、『ニューヨーク・タイムズ』のコラムニスト、デビッド・

<sup>63</sup> ミーシャ・グレーニーの言葉。ミーシャ・グレーニー、前掲書 d の千田善による解説 334 頁。

<sup>64</sup> ethnic cleansing 英語訳としては ethnic purifying もあるが、前者が使われることになった。

<sup>65</sup> ヤセノヴァツでの虐殺については、清水明子「「クロアチア独立国」におけるセルビア人虐殺」松村高夫、矢野久、前掲書を参照。

<sup>66</sup> 千田善『なぜ戦争は終わらないか』、みすず書房、2002 年、60-61 頁。

<sup>67</sup> 高木徹、前掲書、95 頁。

ビンダーは「“民族浄化”は第二次世界大戦のあの忌まわしい記憶を利用した言葉なんだ。この言葉には具体的な意味がないのに、感情だけをむやみに刺激してしまったんだ」<sup>68</sup>と語る。

スーザン・ソントグはサラエヴォでの「ゴドーを待ちながら」の上演を巡るエッセイで、「今世紀に入ってヨーロッパで起こされたジェノサイドのなかで、それを世界の報道陣がこぞって追いかけて、夜ごとにテレビに映し出されたのはこれが初めてだ。(中略)ボスニアでジェノサイドが起こるまでは『ニューズデイ』のロイ・ガットマンや『ニューヨーク・タイムズ』のジョン・バーンズといった現地にいた最良の記者たちの多くが、事実、以下のように確信していた。一報道が外へ伝わりさえすれば、世界は何かをするはずだと考えられた。」<sup>69</sup>と述べている。最良の記者たちとして、名前を挙げられたロイ・ガットマンは、1992年7月末から8月はじめに「ニューズデイ」紙上で、ボスニアから脱出して来た人々の証言から、セルビア人が運営しているムスリム人の「強制収容所」があるとスクープした。彼の記事は「自称」生き残りの証言に依拠した衝撃的な内容だった。セルビア人看守が、ボスニア人囚人の喉をかききって処刑し、遺体はサヴァ川に捨てられたという証言や、ボスニア北部、オマルスカ採掘場跡にある仮収容所に8000人のムスリム人捕虜が収容され、拷問を受けていると報道した<sup>70</sup>。ガットマンは後になって、アメリカ政府の行動を後押しするために報道の厳密な客観性を捨てたと説明している<sup>71</sup>。また、「ニューヨーク・タイムズ」のジョン・バーンズは捕虜になったセルビア人ヘラクに7時間にも及ぶインタビューをし、記事を執筆した。ヘラクはインタビューで、イスラーム教徒29人を殺害し8名の女性をレイプしたと語った。しかし、数年後になって、それが偽証だったことを認め、繰り返し殴られて、自白を強要されたことを告白した<sup>72</sup>。ガットマンとバーンズの二人はボスニア内戦での報道により、1993年のピューリッツァー賞を受賞した。

イギリスのITNの記者たちはオマルスカ近くにあるトルノポリェ収容所を取材した。そこで彼らは、やせ細りあばら骨の浮き出たアリッチという名の若いムスリム人男性を見つけ、以前からそこにあった有刺鉄線越しに彼の姿を撮影した。彼ら自身、「強制収容所」はなかったと、取材地をあとにした。ところが、テープを回してみるとそこには、有刺鉄線越しにいるやせ細った男性という、インパクトの強い映像が映っていた。ITNはこの映像をニュースで放送した。するとアメリカ中のメディアがこの映像を報道した<sup>73</sup>。ブッシュ大統領（当時）が記者会見で

<sup>68</sup> 同上、96-97頁。

<sup>69</sup> スーザン・ソントグ、前掲書、99-100頁。

<sup>70</sup> いずれも『ニューズデイ』の1992年7月から8月にかけての記事。岩崎稔「旧ユーゴの戦争と出来事の否認」『現代思想 総特集 ユーゴスラヴィア解体』86-87頁。

<sup>71</sup> 同上、89頁。

<sup>72</sup> ピーター・ブロック『戦争報道 メディアの大罪』ダイヤモンド社、2009年、295頁。原題はMedia cleansing: Dirty reporting Journalism and Tragedy in Yugoslavia.である。

<sup>73</sup> ITNのペニー・マーシャルは、本社から収容所の取材をし、ネタをみつけるまでは、他の記事は一切送る必要はない、と命令されていたという。高木徹『戦争広告代理店』、講談社、2002年、182頁。

「世界は二度とナチスの“強制収容所”という神を恐れる蛮行を許してはならない。」と発言するに至り、セルビア人悪者論の流れは決定的になった<sup>74</sup>。実際には、その男性アリッチは内臓疾患のためにやせ細っていたのであり、有刺鉄線も収容所の隣にある施設にある有刺鉄線で、トルノポリェは「強制収容所」ではなく、単なる難民の収容施設だった<sup>75</sup>。

日本からも何人かのジャーナリストがボスニアからレポートを送っていた。欧米の大多数の報道が「セルビア人悪玉論」に傾く中、セルビア人勢力側から取材をしていた記者もいた。小磯文雄はホリディ・インでヨーロッパ各国の特派員が口々にセルビア人勢力の悪口を言うのを聞く。ヨーロッパのジャーナリストたちは、「あんな殺人鬼のような連中と会うのはいや」「セルビア人は外国人を嫌っていて、取材はできないと聞いていたぜ」「だって連中は外国人記者を殺すと賞金が出るっていう話じゃないか」<sup>76</sup> などと言っていた。

偏向報道に異を唱えたのが、ピーター・ブロックである。彼は資料をかき集め、いかに報道によって「セルビア人悪玉論」が作り上げられていったのかを検証した<sup>77</sup>。戦争報道において、テレビ、新聞、雑誌などマスメディアの果たす役割は大きい。しかし、そのメディアが真実を伝えていなかったり、虚偽の報道をしたのでなくとも、物事の一面しか伝えなかった結果、偏向報道となってしまうケースもある。また、難民、被害者の証言を聞く際の難しさもある。細かく話を詰めていくと、実際には現場を目撃したのではなく、目撃した人を知っているだけだったり、拷問をうけた人に会ったことがあるというのが、会った人を知っているとなったりして、事実の見極めは困難である。辛い体験を語り続けるうちに無意識のうちに誇張して伝えてしまうということも有り得る<sup>78</sup>。ブロックの著書で、カナダ人退役軍人のマッケンジーは次のように語っている。「おもしろいのは、最近の電話がもつぱら『自分たちの報道を見直しているので、これこれの時期に起きたことをもう一度話してもらえませんか』といった内容であることです」「後悔の念にさいなまれる彼らへの私のメッセージはこうです。『あまり責任を感じないことです。あなた方は見たとおりを報道しただけだし、あなた方はホリディ・インから 150 メートル以内しか見られなかったのですから』とね」<sup>79</sup>

報道の見直しとともに、死者、行方不明者数、被害者数などについては、詳細な調査に基づいた数え直しが必要となっている。死者数の特定には、集団墓地（埋葬地）を掘り起こして、死因を確定するために遺骨を分析し、身元調査のための DNA 鑑定をして人数を確定していく

<sup>74</sup> 高木徹、前掲書、182-184 頁。

<sup>75</sup> ピーター・ブロック、前掲書、375-392 頁。

<sup>76</sup> 小磯文雄『戦場見物』68-69 頁。

<sup>77</sup> ピーター・ブロック『戦争報道 メディアの大罪』

<sup>78</sup> 伊藤芳明「旧ユーゴスラヴィアとメディア」佐原徹哉編、2002 年、前掲書。93-94 頁。伊藤芳明は毎日新聞記者で 92-93 年にクロアチアで難民センターを取材した。ボスニア内戦取材についての著書、伊藤芳明『ボスニアで起きたこと 「民族浄化」の現場から』岩波書店、1996 年がある。

<sup>79</sup> ピーター・ブロック、前掲書、308 頁。

という地道な作業が必要だ。虐殺の被害者数の特定には、遺骨から、死因が虐殺行為によるのか、戦闘中の死なのか、病死なのかといった死因を確定していかなければならない。

この文章を書いている最中、逃亡中だったラトコ・ムラジッチが拘束されたというニュースが飛び込んできた。ムラジッチはかつてのセルビア人勢力司令官で、旧ユーゴ国際戦犯法廷 (ICTY International Criminal Tribunal for the former Yugoslavia)<sup>80</sup> から、スレブレニツァ<sup>81</sup>をはじめとする虐殺の責任者として訴追されていた。スレブレニツァとは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの東部、セルビアとの国境近くの町である。現在ではスルプスカ共和国の一部に組み入れられている。この町は、セルビア人支配地域にあるムスリム人が多数を占める飛び地だった。他のいくつかの町と同時に国連の安全地帯に指定されていた。しかし、1995年7月、男性は家族から引き離され、婦女子は収容所に送られた。大虐殺が行われ、約7千人のムスリム人男性が犠牲になった事件である。集団墓地からは目隠しをし、手や足首が縛られた遺体がたくさん出てきた<sup>82</sup>。スレブレニツァの虐殺は、ICTY から第二次大戦以後のヨーロッパでの最悪のジェノサイドと認定された。

ICTY では民族浄化としてのレイプも裁判の対象となった。戦時下の性暴力は、ユーゴ内戦に限ったことではない。民族を「浄化」するために、多くの女性が性暴力の犠牲者となった。前述の映画「サラエボ、希望の街角」の監督は前作「サラエボの花」で、チェトニック (セルビア人民族主義者) によってレイプされた女性エスマとその娘サラの葛藤を描いている。「サラエボの花」の原題は「グルバヴィツァ」というが、これはサラエヴォ市内のミリャツカ川沿いの一地区でセルビア人勢力下であり、多くの犠牲者がでた地域である。

2001年2月22日 ICTY はフォチャでのレイプと性的隷属を「人道に対する罪」として断罪した。多くの若い女性が、性暴力の犠牲者となった。連行された女性は収容所に連れて行かれ、そこで多くの兵士に暴行された。妊娠すると、出産させられた。民族浄化の一環として組織的にレイプが行われた。

しかし、例えば、セルビア人男性がムスリム人女性をレイプし、女性が子供を産めば、それ

---

<sup>80</sup> 東京裁判以来の戦犯法廷。ICTY の活動については、ホームページで詳細な情報を得ることが出来る。<http://www.icty.org/> また ICTY については日本人で判事を務めた多谷千香子の『「民族浄化」を裁くー旧ユーゴ戦犯法廷の現場からー』岩波新書、2005年やジョン・ヘーガン (本間さおり訳) 『戦争犯罪を裁く』(上) (下) NHK ブックス、2011年がある。上巻には柴宜弘の、下巻には多谷千香子による解説がついている。ICTY については特に初期において、かなりの偏り (被告の多くがセルビア人) があったという点も指摘されている。佐原徹哉『ボスニア内戦』有志社、2008年、282頁。また、セルビア人の犯罪を裁くケースが多く、例えば、クロアチア、ボスニアでの多くの戦争犯罪についての責任が問われるべき、元クロアチア大統領トウジマン (故人) の責任は少なくとも生前は問われなかった。

<sup>81</sup> スレブレニツァについては、長有紀枝『スレブレニツァ』がある。長は NGO 職員として旧ユーゴに関わった経験から、ジェノサイドをテーマとして博士論文を執筆した。本書はその博士論文がベースとなっている。また、「虐殺の村を逃れて」1998年、NHK というドキュメンタリービデオもある。行方不明の夫を捜すムスリム人家族を追っている。

<sup>82</sup> ジョン・ヘーガン、前掲書 (下)、46頁。

が「民族浄化」になるのだろうか？普通に考えれば、セルビア人とムスリム人の両方の血を受けた子供が誕生する。生まれた子をセルビア人の父親が育てれば、そもそも同じ南スラブ人なのだから、セルビア人に育つかもしれない。しかし、サラのように母親が育てたり、養子に出されたりすれば、自分が本当は何人なのか知らないまま育つことになる。

また戦争中には多くの避難民がでた。民族によって、人によって行き先はバラバラである。サラエヴォ出身のある女性は言う。「難民になるということは家を追い出されることですが、それでも、すべて避難民は同じ条件ではないのです。セルビア人はセルビアに行くことができます。クロアチア人はクロアチアに。でもムスリム人は、どこにもいくところがないんです。」<sup>83</sup>そして「多くの人々が自分の名前や出身を否認しはじめた。貧しい人々はそうすることで貧困や不幸から逃れることが出来ると思ったのでしょう。私はこの街にこんなに多くのユダヤ教徒やスロヴェニア人がいることを知らなかった。かれらがバスでサラエヴォを去るときにはじめてわかったことだ。多くの人々は自分の祖先がユダヤやスロヴェニアの血をもっていたのだということを突然発見した」<sup>84</sup> エルサレムに避難したサラエヴォ近郊出身の少年はこう語る。「いつもサラエヴォの夢を見ている。(中略)ここにきて新しい友だちもできたし、新しい言葉も勉強している。ぼくは、ユダヤ人ってのはなんのことなのか、勉強しているんだ。ぼくはユダヤ人なら知ってなくちゃいけないことをぜんぜん知らなかったんだ。あたらしいことばかりだから」<sup>85</sup> パキスタンに受け入れられたムスリム人の母娘の話も紹介されているが、パキスタンでは、あまりに世俗化され、短パンにTシャツ姿で歩き回るボスニアのムスリムたちは煙たがられるだけだった。<sup>86</sup>

では戦争の勝者は誰だったのだろうか？岩田によれば、セルビア人は敗北ムード、クロアチア人には勝利感があるという。クロアチア人は民族として、ほぼ純粋なクロアチア人国家を手に入れ、クライナ地方（クロアチア共和国の領土の20%を占める。かつて自称「クライナ・セルビア人共和国」が存在した。）や西スラヴォニアから多くのセルビア人を追い出した。クロアチアからは25万人、ボスニアのムスリム人地域からは30万人のセルビア人が難民としてセルビアに逃げていった<sup>87</sup>。ムスリム人はクロアチア人ほどではないにせよ勝利感はあるだろうという。ボスニアにおいて、全国土を手中におさめることは出来なかったが、サラエヴォはとれた。ヨーロッパの戦略について岩田は以下のように説明する。文明の衝突的な要素を帯びた戦いで、「ヨーロッパ文明人にとって、短期的に最大の敵は正教文明の最前線のセルビア人である

<sup>83</sup> 古川高子、藤井欣子、高橋明史編訳「サラエヴォ・コラージュ」、『現代思想 ユーゴスラヴィア解体』p.104

<sup>84</sup> 同上、106頁。

<sup>85</sup> 同上、107頁。

<sup>86</sup> 同上、101-109頁。

<sup>87</sup> 岩田昌征『ユーゴスラヴィア多民族戦争の情報像』お茶の水書房、1999年 122-126頁。

が、長期的な敵はイスラーム世界に支えられたムスリム人である。従って西洋文明人としては、長期的な敵のムスリム人を味方にして、ヨーロッパ文明の辺境、つまりは最前線であるスロヴェニア人とクロアチア人がセルビア人と戦うのをカトリック教の同胞として支援する。(中略)しかし、長期的には敵であるムスリム人が、セルビア人に自力で勝ってもらっては困る。(中略)ムスリム人には(略)ヨーロッパ文明人が国家をプレゼントする形にしたい<sup>88</sup>」。

## 6 モスタル

サラエヴォを出発する頃から小雪がちらついていた。雪はあっという間に降り積もった。ボスニア人のバス運転手さんは雪道の運転に慣れているのか、大型トラックが蛇行したり、スリップするなか、順調にドライブを続けた。それでも渋滞があったりしたので、予定時刻よりは多少遅れてモスタルに到着した。モスタルには「スターリ・モスト」(古い橋という意味)というアーチ型の石の橋がある。

もともとの橋は16世紀、オスマン帝国時代に建造されたものだ。オスマン帝国のスレイマン1世の官邸付建築士スィナンの弟子のハイレッディンが、街の真ん中を流れるネレトヴァ川にかけた幅4.49メートル、長さ28.7メートルの橋である。モスタルの南にあるムコシャという石切場から切り出された石が使われた。

モスタルでは、窓越しに見えるたった一つの石造りのアーチだけで支えられている美しいスターリ・モストを眺めながら、チエヴァプチッチというトルコ風の細長い肉団子のグリルを食べた。トルコ料理のキョフテのようなものだった。橋は内戦中の1993年11月9日にクロアチア人勢力に破壊された。橋を挟んで、東側には主としてムスリム人が、西側にはクロアチア人が住んでいたが、橋は彼らを分断するものではなく、彼らを結びつける象徴であった。モスタルという名前自体、「橋の番人」という意味を持っている。

2004年に橋は再建された。橋の再建チームのリーダーとして選ばれたのは、クロアチア人でもムスリム人でもない、フランス人の土木技師だった。彼は分断された川の両岸から、クロアチア人とムスリム人を雇い入れて、淡々と橋を建造した<sup>89</sup>。

夏には橋の下を流れるネレトヴァ川に飛び込むというパフォーマンスが行われるのだという。橋を渡ったところの小さな建物の入り口付近に「Don't forget '93」と刻まれた小さな石碑があった。(写真4) 私たちが訪れた日は特に寒く、強風が吹いていた。もちろん、橋から飛び込む若

<sup>88</sup> 同上。131頁。

<sup>89</sup> マイケル・イグネティエフ(中山俊宏訳)『軽い帝国 ボスニア、コソボ、アフガニスタンにおける国家建設』風行社、2003年、47頁。



写真 4



写真 5

者の姿も見えない。町は閑散としていた。いまだに銃弾の跡が残る建物が街のあちこちにあった。(写真5) クロアチア人地区とムスリム人地区の境界にあたる場所である。まだ修復していないだけなのか、永遠に修復しないのかは不明だ。

モスタルの街を見下ろす山には十字架が立っていた。モスタル探索を楽しみたかったが、あまりの強風と寒さに耐えかねて、町を一回りしたあとに、そそくさとバスに乗り込んだ。夏の観光シーズンにはたくさんの観光客で賑わうのであろうが、私たちが訪問したときには人影はまばらだった。

## むすびに変えて ドゥブロヴニク

オレンジの屋根の家々が立ち並ぶ、アドリア海に面した小さな町、それがドゥブロヴニクである。「アドリア海の真珠」と呼ばれ、かつてはラグーサ共和国として、対岸のヴェネチアとアドリア海の覇権争いをした古くからの商業都市である。宮崎駿のアニメ「魔女の宅急便」のモデルになった街とも言われている。メインストリートのプラツァ通りには美しい敷石が敷き詰められている。一周2メートル、厚さ5メートル、高さ20メートルの城壁が張り巡らされている。城壁の上から、サッカーをしたり、洗濯や昼寝をする普通の人々の生活を見た。

この町は早くから充実した都市機能を持ち、自由と独立を何よりも大事にしてきた。要塞の入り口には「あらゆる黄金にかえても自由を売るはよしからず」とラテン語で書いてある。総督は「私事を忘れ、公事に徹せよ」というモットーに従って無給で働いた。なおかつ、権力が集中しないように11名の総督が月ごとに交替で街を治めていた。1317年に開業したというヨーロッパ最古の薬局の1つが今でも営業していた。

町はきれいに修復され、1990年代初頭に戦争が戦われたとは思えないほどであった。「修復されたことに気がつかないほど不自然なところがないのは、破損した家や教会などの本体はもちろんのこと、細部の飾りやレリーフにいたるまで、爆弾によって吹き飛ばされた破片を拾い集めて、足りない部分は中世に使われたものとまったく同じ石を探し、石工の手によって一つひとつ修復されたからだ」<sup>90</sup>と言われている。現在の街で戦争の後を示すのは、市内のあちこちに貼られていた被害箇所をあらわす地図くらいだった。

クロアチア共和国議会は、1991年6月25日に独立宣言を採択した。スロヴェニア共和国議会も同時に独立宣言を採択したが、両者の文面は微妙に異なっていた。スロヴェニアでは「スロヴェニア共和国の自立および独立に関する憲法上の決議」と文字通り「独立宣言」だったのに対して、クロアチアでは「クロアチア共和国の主権および自立に関する憲法上の決議」で、

<sup>90</sup> 外山純子、中島賢一、前掲書、57頁。

独立というより「自立宣言」であったという。クロアチアが独立を明確に打ち出したのは、内戦が本格化してからだった<sup>91</sup>。

旧市街を見下ろすスルジェ山頂からは町が一望できる。山頂のロープウェー駅は戦争中に破壊され、しばらくの間、山に登るには徒歩かタクシーで行くしかなかった。内戦で破壊されたドゥブロヴニクは一時期、危機に瀕している世界遺産とされていたが、改修も終わり、街はかつての美しさを取り戻した。ロープウェー駅も修復されていた。ロープウェーはあつという間に頂上に到着した。山頂にはラグーサ共和国を崩壊に追い込んだナポレオンが建てた大きな十字架が建っている。現在では、それがクロアチア内戦の犠牲者への碑ともなっている。山頂から美しい町並みを眺めながら、この地域の複雑な歴史を思い返した。結局、犠牲者はいつの時代にも市民で、みずからの意思に反して、戦争へと巻き込まれて行く。三つ巴の戦争ですべての民族が犠牲になった。

2010年3月31日、セルビア議会はボスニア・ヘルツェゴヴィナのスレブレニツァでの虐殺を非難し、謝罪する決議を採択した。セルビア大統領のボリス・タディッチは同年、7月11日に開催されたスレブレニツァ虐殺15周年の式典に出席した。また、11月4日にはタディッチはクロアチアのヨシポヴィッチ大統領とともにクロアチア内戦の激戦地、ヴコヴァルを訪問した。タディッチ大統領は、クロアチア人兵士と民間人が殺害されたオヴチャラにある慰霊碑に献花をし、「私は犠牲者を悼み、お詫びと後悔の念を申し上げるためにここに来ました。今後、セルビア人とクロアチア人が、セルビアとクロアチアがよりよい未来を紡ぎますように」と述べた<sup>92</sup>。今後のこの地域の和解の行方を見守っていきたい。

---

<sup>91</sup> 柴宜弘、1996年、158-9頁。

<sup>92</sup> “EU welcomes Serbia-Croatia reconciliation move” <http://www.euractiv.com/en/enlargement/eu-welcomes-serbia-croatia-reconciliation-move-news-499483> 2011年7月7日アクセス